

# 産婦人科病棟のデスカンファレンスのあり方 —看護師・医師への質問紙調査の結果より現状を振り返って—

キーワード：デスカンファレンス・看護師・医師

1 病棟 4 階西

山本亜裕美 福永智子 佐伯礼子 藤野聖子 角谷博美 吉村久美

## I. はじめに

デスカンファレンス（以下 DC とする）とは、患者の死後に行われるカンファレンスのことであり、DC の方法は施設によって様々である。

A 病院産婦人科病棟では、療養経過が長期に渡り、同病棟で終末期を迎えられるケースが年間 10 例程度ある。そのため、終末期ケアの充実を目的とし、H19 年より DC に取り組んでいる。また、終末期看護を行っていくうえで医師との連携は必要不可欠であり、医師の考えや意見も聞き、複数の視点で考えたいという思いより、医師にも協力を求めている。しかし、同病棟の DC は、話し合う内容の焦点がはっきりしておらず、DC 本来の目的が果たされているのか、効果的な DC が行えているのかと疑問に感じた。そこで、当病棟での DC をより良いものにしたいと考え本研究に取り組むことにした。

## II. 目的

DC に対する看護師・医師の認識を明らかにし、DC の現状を振り返ることで、DC のあり方を検討する。

## III. 研究方法

### 1. 研究対象

DC の参加経験がある、看護師 9 名・医師 5 名

### 2. 研究期間

平成 22 年 8 月～9 月

### 3. 調査方法

先行研究を参考に独自の質問紙調査票を作成。

無記名自記式質問紙調査とし、選択回答の項目は単純集計とした。

### 4. 調査項目

①参加者の目的

②DC に期待する効果

③DC で注目する内容

④DC の改善の必要性の有無、改善点と具体策

⑤DC に対する印象・理想・意見

(①～④複数回答、④の一部・⑤自由記載とした)

### 5. 倫理的配慮

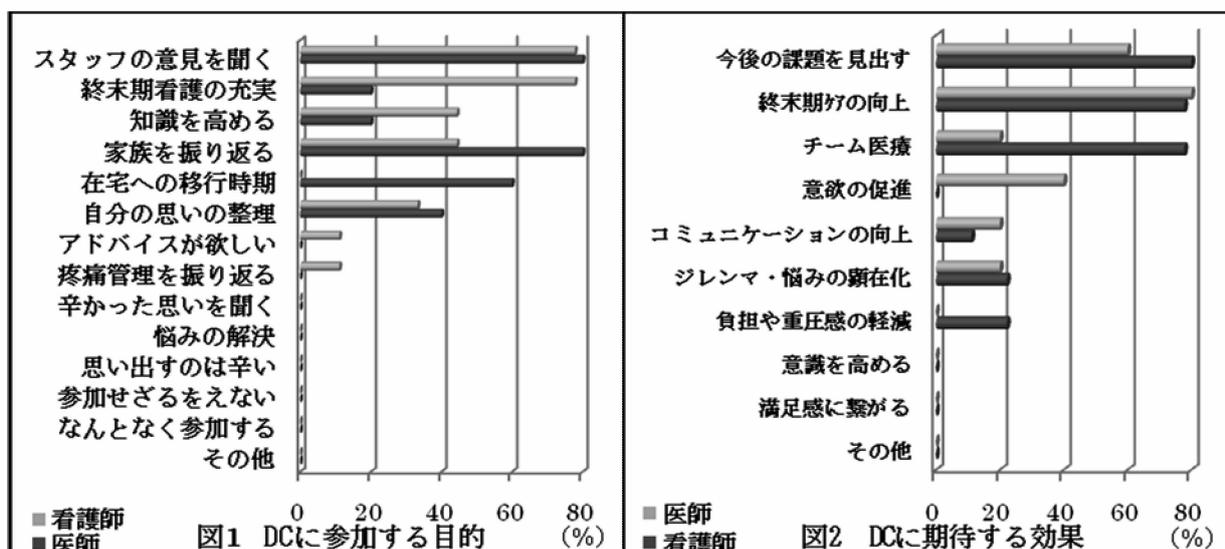
1) 研究の主旨を説明し、質問紙の提出をもって同意を得られたものとした。

2) A 大学病院 IRB の承認を得た。

#### IV. 結果

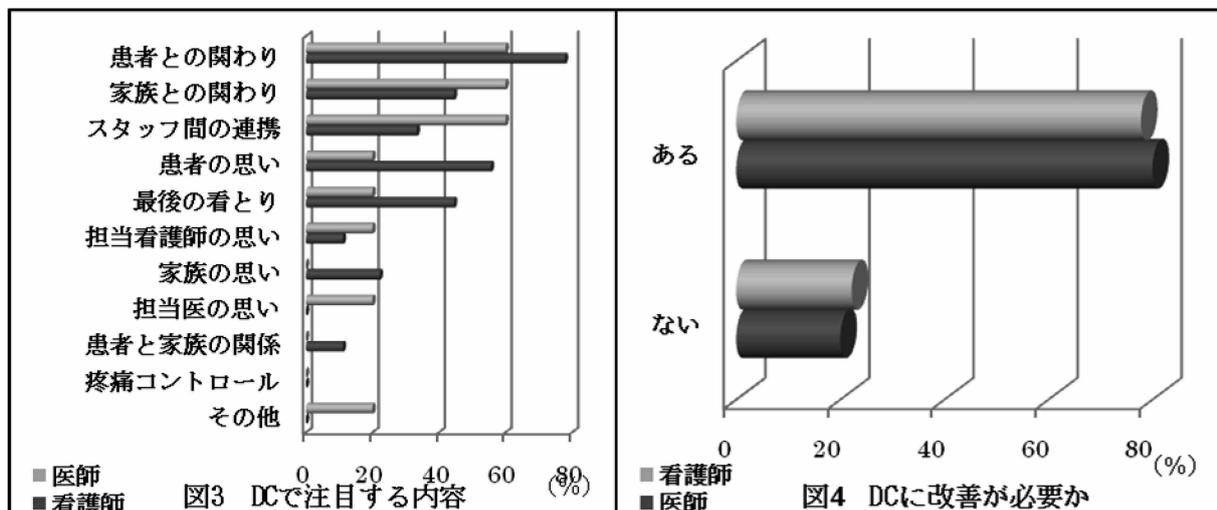
『DCにどのような目的をもって参加しているか』という問いより、看護師は「他のスタッフの意見を聞きたい」・「終末期看護を充実させたい」がともに77.8%、「終末期看護に対する知識を高めたい」・「患者や家族との関わりについて振り返りたい」がともに44.4%であった。医師は「他のスタッフの意見を聞きたい」・「患者や家族との関わりについて振り返りたい」がともに80.0%、「在宅への移行時期について話したい」が60.0%であった（図1）。

『DCを行うことでどのような効果が得られることを期待するか』という問いより、看護師は「終末期ケアの向上」が88.9%、「終末期ケアの向上」・「より良いチーム医療に繋がる」がともに77.8%であった。医師は「終末期ケアの向上」が80.0%、「今後の課題を見出せる」が60.0%、「看護師・医師の意欲の促進」が40.0%であった（図2）。

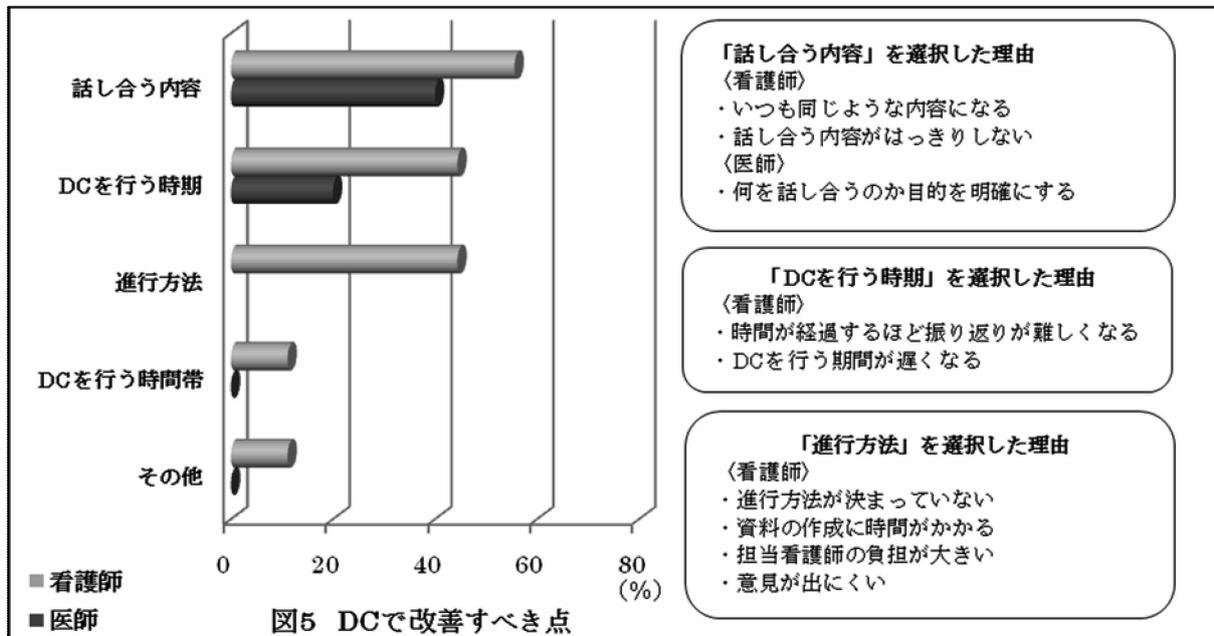


『DCに参加した際、重点をおいている内容は何か』という問いより、看護師は「患者との関わり」が77.8%、「患者の思い」が55.6%、「家族との関わり」・「最後の看取りについて」がともに44.4%であった。医師は「患者との関わり」・「家族との関わり」・「スタッフ間の連携」がそれぞれ60.0%であった（図3）。

『DCに参加し改善が必要だと思ったことがあるか』という問いより、DCに改善の必要性が「ある」と回答したものは、看護師77.8%・医師80.0%であった（図4）。



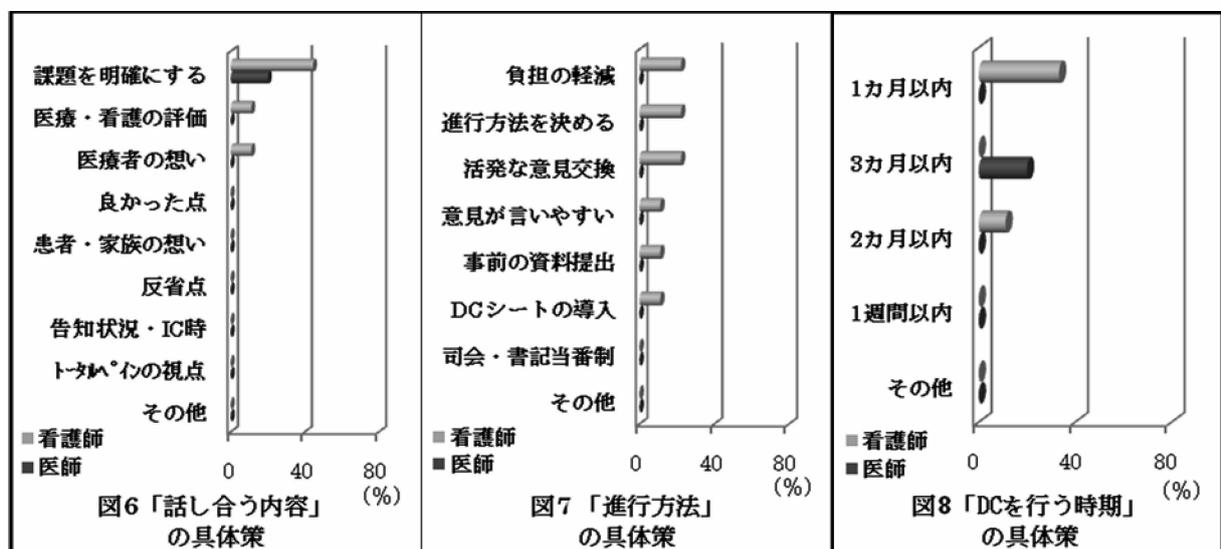
『改善すべき点』としては、「話し合う内容」が看護師 55.6%・医師 40.0%であり、選択した理由は「いつも同じような内容になってしまう」・「話し合う内容がはっきりしない」であった。次に「DCを行う時期」が看護師 44.4%・医師 20.0%であり、選択した理由は「時間が経過するほど振り返りが難しくなる」・「DCを行う期間が遅くなる」であった。また、「進行方法」が看護師 44.4%・医師 0%であり、選択した理由は「進行方法が決まっていない」・「担当看護師の負担が大きい」・「意見が出にくい」であった（図5）。



『「DCで話し合う内容」の具体策』において、看護師は「次への課題を明確にする」が44.4%、「医療・看護の評価を重視する」・「医師・看護師の思いを重視する」がともに11.1%であった。医師は「次への課題を明確にする」が10.0%であった（図6）。

『「進行方法」の具体策』において、看護師は「担当看護師にかかる負担の軽減を考慮」・「会を円滑に進めるために進行方法を決める」・「意見交換を活発に行う」がそれぞれ22.2%であった。医師は全ての項目において0%であった（図7）。

『「DCを行う時期」の具体策』において、看護師は「1カ月以内」が33.3%、「2カ月以内」が11.1%であった。医師は「3カ月以内」が10.0%であった（図8）。



自由記載より得られた回答は表 1 に示す。

表 1 自由記載の回答

<p><b>1. DC のイメージ</b></p>
<p>〈看護師〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 看取りの看護、介入方法について考え、チームスタッフからみた視点を学べる場</li> <li>・ 医療や看護を行ってきたことへの評価</li> <li>・ 今後の課題や看護、医療の質を向上する為に実施する</li> <li>・ 思いの共有や振り返りに有効である</li> <li>・ 死に至るまでの長い経過をみつめ、次のケアに生かせるカンファレンス</li> <li>・ 個人での考え方は違うと思うので思いを情報交換する</li> <li>・ 医療従事者の癒しの場、死を受け入れるための場</li> </ul> <p>〈医師〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 経過、関係の多様性、個人差を理解することで、適応能力をみにつける</li> <li>・ 患者さんと家族のためにしてあげられる医療の一つ</li> </ul>
<p><b>2. どのような DC なら参加する価値があるか</b></p>
<p>〈看護師〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 担当患者の症例であれば担当看護師への良かった点の評価を言ってもらいたい</li> <li>・ 担当看護師の思いを受け入れてもらえるような雰囲気があると良い</li> <li>・ 積極的に意見交換され、課題を見出せるカンファレンス</li> <li>・ 短時間で、次へつなげる課題を振り返る</li> <li>・ 強制的でなく、参加者が意義を少しでも感じられると良い</li> </ul> <p>〈医師〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ターミナルケアは医学的なことだけでなく、関わりや介入については、看護師がもっと意見を言って欲しい</li> <li>・ 医療者の間でケア、医療の方針を共有でき、互いに問題点を出し合い助け合える</li> <li>・ 今後同じようなケースがあった場合にどのようにしていくかまで話合える場</li> <li>・ 関わりや介入に関しては看護師がもっと意見を言って欲しい</li> <li>・ 次の症例に生かすことができ、問題点や改善点を顕在化できる</li> </ul>
<p><b>3. DC に対する意見</b></p>
<p>〈看護師〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日々のカンファレンスを充実させたい</li> <li>・ 効果的な DC を行うためには、何のために DC を行うのか必要性をスタッフが理解する必要がある</li> <li>・ デスカンファレンスはスタッフのためにも必要だと思う</li> <li>・ できれば、DC はしっかりと時間を取ってやっていけたら良いと思う</li> <li>・ 他の病院の DC の方法を知りたい</li> </ul> <p>〈医師〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ もっと主治医に聞くなり提案をして欲しい</li> </ul>

## V. 考察

今回の研究では、看護師・医師ともに、DC に対する期待は高いことは分かったが、その反面、DC のあり方に改善を求めていることが明らかになった。

現在行っている DC は、担当看護師に進行方法や開催時期、司会・書記といった役割を一任しているため、個人にかかる負担が大きくなっていると言える。そこで改善策として、進行方法を統一し、司会・書記などの役割を分担し DC を行っていくことが、担当看護師の負担の軽減に繋がるのではないかと考える。また、DC を開催する時期について、先行研究では毎週曜日を定めたり、患者の死後 2 ヶ月以内に行うなど、定期的に DC を行っている施設が多い。調査結果では、看護師は患者の死後 1 ヶ月以内、医師は 3 ヶ月以内を選択しているものが多かった。以上のことから、まずは DC の開催時期を患者の死後 1～3 ヶ月以内に定め、確実に DC を行っていきたいと思っている。

杉山らは、DC をさらに有効なものにするためには、事前に話し合いたい内容を明確にしておく事が重要である<sup>1)</sup>と述べている。しかし、看護師・医師の多くが、DC での「話し合う内容」に改善を求めていたことから、現在の DC は話し合う内容が明確であるとは言えない。これは、普段より看護師間での意見交換が十分に行えておらず、DC の対象となる患者の話し合うべき問題点を、把握できていないためではないかと考える。また、自由記載では、看護師より「日々のカンファレンスを充実させたい」、医師より「もっと主治医に聞くなり提案をして欲しい」といった意見がきかれた。これらのことから、日々のカンファレンスを情報共有の場としてだけでなく、患者のケアや目標の評価・修正の場として有効に活用し、さらに医師との意見交換を行うことができれば、充実したカンファレンスになると考える。よって、DC での話し合う内容の焦点を明確にするためには、日々のカンファレンスを充実させ、他職種との連携を深めていくことも重要であると思われる。

DC 本来の目的は、今後に生かせるケアの方法や視点を見出すこと、よりよいチーム医療に繋がること、医療者の負担や重圧感の軽減に繋がることであるといわれている。

調査結果の「DC に参加する目的」より、看護師・医師はそれぞれが目的をもって DC に参加していることが分かったが、自由記載では、看護師より「効果的な DC を行うためには、何のために DC を行うのか、必要性をスタッフが理解しなければならない」といった意見が聞かれた。このことから、看護師・医師は、DC 本来の目的について共通認識できていないのではないかと考える。よって、今後の DC をより効果的にするためには、スタッフに DC 本来の目的を伝えたいうえで、DC に取り組むことが大切であり、スタッフ一人一人の目的や意欲の向上、満足感にも繋がるのではないかと考える。

## VI. 結論

1. DC への参加目的として、他のスタッフと意見交換を行うことが、看護師・医師ともに高かった。
2. 看護師・医師ともに、DC に改善の必要性が「ある」と感じていた。
3. DC は話し合う内容の焦点をしぼり、開催時期や進行方法を決めて、開催する必要がある。
4. より効果的な DC を行うためには、DC の目的を共通認識し、また、日々のカンファレンス等で情報交換を行っていくことが必要である。

引用・参考文献

- 1) 杉山裕子ら他：デスカンファレンスが看護師の心の負担にもたらす効果—3 事例を振り返っての検証—，第 40 回日本看護学会論文集（成人看護Ⅱ），9-11，2009.
- 2) 吉木恵美ら他：終末期患者のデスカンファレンスにおいて看護師が注目すること，第 37 回日本看護学会論文集（成人看護Ⅱ），2006.
- 3) 沼澤佐代子：医療者・患者家族の癒しにつながるデスケースカンファレンス，看護学雑誌，64-6 巻，p 534~538，2006.